

地域住民と行政による小川の自然再生 「ふるさとの川づくり事業」の記録

Proceeding of collaborative river restoration “Furusato no kawadukuri”

吉橋久美子・山本大輔

Kumiko YOSHIHASHI and Daisuke YAMAMOTO

要 約

豊田市扶桑町および百々町を流れる岩本川をモデルとして行われている「ふるさとの川づくり事業」は、川と関わって生きてきた「地元」に見守られつつ発足し、子どもの川遊びを目的化することで、土地と深く関わってこなかった世代や転入者を取り込んだ川づくり団体結成へと結びついた。住民にあまり意識されていなかった岩本川は、3年を経て、「見られる」川、変化に「気付かれる」川、生き物が「いる」ことが「知られた」川となって、地区での存在感を増した。一方、課題である「活動の次世代への継承」等が、このまま川遊びと川づくりを続けることで自然になされるのか、またはなんらかの仕組みを持つべきなのか模索しなければならない。

キーワード：ふるさとの川づくり、共働、小さな自然再生、川遊び

はじめに

1. 研究の背景と目的

河川行政に関する国の方針は1990年の建設省(当時)の通達『多自然型川づくり』の推進についてが変わり目となり、「治水」「利水」に加えて「生物の生育環境」や「自然景観」への配慮が求められるようになった。その方針は1997年の改正河川法に反映され、2006年には「地域の暮らしや歴史・文化との調和」などを視野に入れた「多自然川づくり」が、「すべての川づくりの基本」とされた(多自然型川づくりレビュー委員会, 2006)。2003年には「自然再生推進法」(環境省)が制定され、2014年の「自然再生基本方針の見直し」では「地域住民が主体となり身近な自然を再生する」「小さな自然再生の推進」(環境省, 2015)が盛り込まれている。

近年、これらに基づいて、損なわれた自然環境の再生が各地で行われており、それらは自然科学的知見のもとに進められるが、同時に社会科学的研究も行われている。祖田・柚洞(2012)は河川行政に焦点をあてて環境配慮型河川改修の諸事例を分類・整理し、「多自然(型)川づくり」は「現在においても議論が成熟していない状況にある」とし、『自然とは何か』という思想性の欠如を指摘する。

住民や、住民と研究者が行政とともに川を自然再生については、福岡県の上西郷川の自然再生と愛着心の

醸成について(林, 2015)など、各地での実践について成果と課題が整理されつつあり、「住民の水辺に対する関心が高まるだけでなく、住民同士の結束や地元に対する愛着も高まる」と期待されている(日本河川・流域再生ネットワーク, 2017)。小さな自然再生を円滑に進めるための人材育成プログラムについては和田らが「人づくりのPDCAプロセス」(「見直し」)¹を試案として提案している(和田ほか, 2017)。また、川に限らず環境保全に関する各地の取組において「うまくいかない」事例も見受けられるようになり、これらに対して宮内泰介ら(宮内編, 2013, 2017)は「(科学的・社会的な)不確実性のなかで価値や制度を柔軟に変化させながら試行錯誤していく協働の仕組み」である「順応的ガバナンス」を提案している。

本稿では、豊田市で行われている共働²による小川の自然再生「ふるさとの川づくり事業」のモデル事例について、その立ち上げから3年間の過程と住民意識の変化を報告する。

2. 研究の方法

筆者らは山本を主としてふるさとの川づくり事業を進めつつ、山本は魚類を専門とする研究者としても住民と関わり、吉橋は聴き取りや事業に参加した住民へのアンケートを実施した。

調査対象地と「ふるさとの川づくり」事業の概要

1. 岩本川と周辺地区の概要

岩本川は豊田市を流れる矢作川支流の、花崗岩帯の砂河川で、流路延長約 3.3 km、流域面積は約 2.5 km² である。現在ふるさとの川づくり事業の対象となっているのは扶桑町 (73.7 ha, 約 600 人) と百々町 (65.1 ha, 約 1,300 人)³ の間を流れる約 700 m の区間である。岩本川は普通河川であり、管理者が市町村長である。河川法の適用を受けない点で一級河川や二級河川および準用河川と異なっており、管理上の自由度は高い。

事業開始前、岩本川には流れてきた土砂が厚く堆積してヨシなどの草が繁茂し、流れを阻害するようになっていたため、治水上、浚渫を希望する声が地元からあがっていた。2015 年度から市が段階的に浚渫を進めている。護岸上の道路から水面までは大人の背丈を優に超える高さがあるが階段はなく、住民は降りることが難しい状況だった。

豊田市は昭和 30 年代からの自動車産業の隆盛により人口が増え、1960 年に約 15 万人 2 千人だった人口が、



図 1 調査対象地広域図



図 2 調査対象地

1978 年には約 30 万 5 千人と倍になっている。2005 年度の周辺町村との合併を経て 2016 年度の人口は約 42 万 5 千人である。

岩本川が流れる扶桑町・百々町地区は市街地から車で 10 数分と近いが比較的耕作地が多い地区であり、古くから人が住んでいるエリアと、人口増を受けた団地や新興戸建住宅地などが併存し、流入してきた住民も多い⁴。

扶桑町はもともと「古峯」と呼ばれ、木材を下流の間屋に取り次ぐ回漕間屋があり、百々町には樹木の伐採から製材までを扱う材木間屋があつて、山で伐られた木材を川の流れに乗せて河口まで運ぶ「流送」のための中継基地として昭和初期までにぎわった。

扶桑町は「古峯プロジェクト」⁵ と呼ばれる、矢作川の環境復元を目指した研究の対象地となり、矢作川と人々の暮らしについて詳細な論考がある (小川, 2003)。耕地面積の少ない古峯では、筏師や竹のタガづくり、養蚕など、多様な稼ぎを組み合わせてきた人々の暮らしがあり、人々は「土地と苦楽を共に」し、「土地とのやり取り」 (小川, 2003) をしながら生きた。そこには当然のように子どもたちが矢作川の川辺や支流の小川で遊ぶ姿があつた。その暮らしが、先述した自動車産業の隆盛による産業構造の変化や、ライフスタイルの変化によって急速に変化し、川と人の距離が離れていった。

高度経済成長期以降、矢作川はヘドロや汚水による汚濁などで水質が悪化し、半官半民組織である矢作川沿岸水質保全対策協議会 (1969 年設立) の反公害運動をはじめとするさまざまな取り組みが行われていた。90 年代に入ると河川管理者や漁業団体、自然保護団体などで結成する「豊田市矢作川環境整備計画検討委員会」の設置 (1991)、スイス・ドイツへの先進地視察なども行われ、1992 年には扶桑町地内の矢作川に近自然工法の水制工が設置された (古川, 2003)。

この水辺は「古峯水辺公園」と名付けられ、1993 年に地元住民有志の「古峯水辺愛護会」が誕生し、密生していた竹の伐採や草刈りやごみひろいなどを行ってきた⁶。古峯水辺公園は川にまつわる団体の集いである「川会議」 (2001 ~ 2015 年) の会場や地域のイベントとして多くの参加者を集めた「筏下り大会」 (1987 ~ 2005 年)⁷ の筏の出発地点となったこともある (矢作川漁業協同組合, 2003)。百々町でも、矢作川の川辺の散歩道を整備することなどを目的に 2003 年に「百々水辺愛護会」ができて活動を続けている。

このように、いったんは薄れた川と人との関わりが続いてきた地区ではあるが、愛護会は高齢化が進み、川辺

でのイベントもなくなり、子どもや子育て期の住民が矢作川や岩本川など地元の川と直接関わるきっかけはあまりなかった。

2. ふるさとの川づくり事業の概要

岩本川が流れる地域に限らず、人と川に「距離がある」状況は長く続いている。『豊田市矢作川河川環境活性化プラン』（豊田市、2016）では、この課題への対策として、身近な小川を住民が「手づくり」することが「川への愛着心」が育つ「地域風土」の醸成につながるとされている。

こうした経緯があって、豊田市の第8次総合計画に「ふるさとの川づくり事業」が施策として位置づけられた。事業は、浚渫工事をきっかけとして、「地域住民の手による身近な小川の自然再生を通して地域の自然への愛着を醸成し、市民と共働で守り続ける自然豊かな川づくりを実施」⁸するものである。この川づくりにより、土砂が溜まりにくい川（治水安全度の高い状態）とする狙いである。

市内での多自然（型）川づくりと住民（「水辺愛護会」）

による水辺の日常管理はそれまでも行われていたが、ふるさとの川づくりは以下の点でそれまでと異なっている。まず、浚渫を契機として共働で川づくりをすること。また、川の「中」にも住民が手を入れること。そして、子育て世代を川づくりの主体として川好きな子ども（川ガキ）を育成しようとするのである。

また、「ふるさとの川づくり」事業は豊田を「わくわくする世界一楽しいふるさと」にすることを目指す豊田市の事業「WE LOVE とよた」の「行動計画」の一つでもある。

水辺愛護会が抱える高齢化や人手不足という課題（吉橋、2016）に対して、ふるさとの川づくり事業によって若い世代が川を「体験」することによって、いずれ水辺愛護活動を担う人材になることも期待されている。

行政の役割として、豊田市河川課が土砂の浚渫、水制工等の設計施工、自然石の調達などを行った。豊田市矢作川研究所は事業のコーディネーター、行政と住民とのパイプ役を担い、生態系への配慮や順応的な管理のサポート役を担った。川づくりにあたっては、『「小さな自然再生」研究会⁹』の構成員とも連携している。

表1 ふるさとの川づくり事業の流れ（2015年度～2017年度）

年	月日	行事・できごと	人	内容
2015年度～ 市による浚渫工事が下流から段階的に実施された。				
2015年度	6/13	第一回川づくり懇談会	25	豊田市から事業概要、浚渫工事について説明。住民らは「昔の岩本川」のことを語りあった。
	7/25	岩本川探検隊	21	川遊びをしながら「今の岩本川」を体感した。
	9/26	第二回川づくり懇談会	17	岩本川がどんな川になったらいいか、アイデアを出し合った。
	10/18	岩本川探検隊	8	申し込み不要の「気軽な川遊び」として企画。
	12/5	第三回川づくり懇談会	22	第二回で出たアイデアを図にまとめたものを「未来希望図」として確認し、今後の進め方について語り合った。
2016年度	6/18	川づくり打ち合わせ会	11	扶桑町および百々町住民、子ども会の役員らと「川づくり」体験会について話し合った。
	7/17	川づくり体験会	53	「川づくり」（生き物のすみか作り、足場づくり、魚道作り）を実施した。
	8/20	岩本川探検隊『ikimon GO』	39	7月に行われた川づくりの「その後」を確認することもかねて実施。捕れた生き物の種類を記録する趣向。
	12月	川に降りる階段設置	-	市の施工。維持管理や川遊びの際、堤防から川へののぼりおりがし易くなった。
	3/26	「岩本川創遊会」発足	7	地元住民による川づくりの団体が7人で発足。（2017年度9月時点で10人に増えた）。
2017年度	4/29	川づくり	8	岩本川創遊会の定例の草刈りの後、石を組みなおした。
	7/22	岩本川探検隊『さがせドジョウ三兄弟』	28	好む場所が違う三種類のドジョウを探すことで岩本川の多様性に気付いてもらうことを狙った。
	9/23	川づくり技術講習会	10	近自然工法の専門家（事業者）を招いて石組みを学んだ。
	3月	水制設置、階段設置	一	市の施工。階段が1基、水制が6基設置された。
「ふるさとの川づくり事業」関連以外の主体も岩本川を活用した。把握できているものは以下。 2015年9月…「小さな自然再生」現地研修会第一回（主催「小さな自然再生」事例編集委員会（研究所共催））。 2017年5月…地元小学校5年生が岩本川で川学習（岩本川創遊会＋研究所がサポート）。 7月…「生きもの調査」（主催「高橋交流館（地域の生涯学習施設）」）。 2017年10月…「カワサボ」（「流域を考えるクラウドファンディング」）交流研修会 エクスカーションとして岩本川創遊会の会員と川づくり。「森のようちえん」の親子やボーイスカウトなども川で遊んでいる。				

ふるさとの川づくり事業のプロセス

1. 3年間のプロセス

2015年、豊田市は扶桑町からの浚渫要望に応えると同時に「ふるさとの川づくり事業」を提案し、その結果、3回にわたって「みんなで考えよう！みんなでつくろう！ふるさとの川・岩本川の川づくり懇談会」（以下、川づくり懇談会）が行われることになった。以下、その内容を参加者アンケートの結果も交えつつ述べる（表1）

・2015年度

＜第一回川づくり懇談会

…昔の岩本川を語り合う（6月13日）（図3）＞

開催に当たっては扶桑町自治区の回覧や子ども会への告知などを通して参加者を募った。6月の初回は地域住民25名（古巣水辺公園愛護会会員、自治区役員、こども会役員ら）（30・40代4人、50代3人、60代8人、70代3人、80代2人、不明5人）が参加し、市からの事業概要説明が行われて住民からの賛同を得た。その後、小グループに分かれて「昔の岩本川」の次のような思い出が語り合われた。

岩本川はかつて周りの田んぼからそのまま斜面を降りて中に入ることのできる「用水路のような」川であり、近くの住民（50代より上）は子どもの頃はポンツク（魚とり）などをして毎日のように遊んでいたという。岩本川が大きく変化した契機は、1972（昭和47）年7月に起きた47（よんなな）災害と呼ばれる豪雨災害だった。岩本川は溢れ、県道にかかる「岩本橋」は破壊は免れたものの、他の橋は流され（Oさん 150622（2015年6月22日に聞き取りをしたことを示す。以下同じ）、その後、コンクリート二面張りの川になった（愛知県土木部編、1975）。2000年9月の東海豪雨でもこの地区は浸



図3 第一回住民懇談会

水している。

また、岩本川の話題と言えば、2003年にホテルが大発生したことが挙げられる¹⁰。農道は見物の人でにぎわい、渋滞が起きたほどだという。しかしその後は、地域全体で岩本川が話題になるような大きなできごとはなかった。転入者にとって岩本川は遠い存在であり、今でも岩本川にはホテルが出ることを知らない住民が古くからの住民の話にしきりに感心していた。

会の最後に88歳の男性が「この事業は大変よいことである」と力強く発言した。この男性は古巣水辺公園愛護会の設立時の中心人物である。この日の参加者の半数近くが長年矢作川の川辺を整備してきた愛護会会員であり、岩本川のふるさとの川づくり事業は、愛護会会員に見守られながら誕生したとあってよいだろう。

参加者アンケートでは、岩本川と「ここ3年ほどで」関わりあるのは22人中12人で、草刈り（自治区単位で年二回行われる「環境美化の日」など）や散歩をしていると答えた。岩本川がどのような川になったらいいと思うか（自由記述）については回答した14人中8人が「子ども」または「孫」が「安全に遊べる川になってほしい」というものだった。また「ホテルが飛ぶ川になるとよい」「川イコールふるさとと思える川になってほしい」という回答もあった。

＜川遊び体験会「岩本川探検隊」

…今の岩本川を体感する（7月25日）（図4）＞

夏休みに「今の岩本川」を体感するため、親子向け川遊びの会「岩本川探検隊」が自治区の協力のもとで行われ、地域の親子約20人がガサガサ（タモ網を使って生き物を捕まえる）を行った。岩本川を、矢作川と合流する直前の「下流ゾーン」と、当時浚渫したばかりの「浚渫ゾーン」、「上流ゾーン」に分け、上流と下流ではガサ



図4 岩本川探検隊（2015年度）

ガサを行い、その間の浚渫ゾーンには魚をとるためのペットボトル製の「仕掛け」をした。子どもたちは生き生きと川遊びを楽しみ、歓声が響いた。カワムツやオイカワ、ブラックバス、ヨシノボリ、シマドジョウやホトケドジョウなど多くの魚がとれ、ゾーン別に分けて水槽に入れて観察した。

参加者アンケートでは、「危なそうだから」「どこで遊べばよいかわからない」などの理由によって、回答した8人全員（平均年齢38歳）が「自分の子どもは岩本川で遊んだことがない」と答えた。そして、「草が生い茂っている時はきたないと思っていた」「通学の時にながめてるだけ」だった岩本川が、この日「こんなにたくさんの魚がいるとは思わなかった」「近くなのに知らなかった。また、子どもと一緒にとりにきます」「自分も一緒に楽しんだ」というように、魅力のある場所であることが理解された。

岩本川がどんな川になったらよいかについては、「子どもたちが安全に遊べる川」(5人)「生きもの(魚)がたくさんいる川」(3人)「きれいな川」(2人)という回答だった。この日ははしごを用いて川に下りたこともあり「もう少し降りやすい場所があればいいと思う」と

いう回答もあった。

＜第二回川づくり懇談会

…未来の岩本川を描く(9月26日)＞

第二回川づくり懇談会では「未来の岩本川」の望ましい姿(「未来希望図」)のアイデア出しを行った。グループに分かれ、岩本川の航空写真の上に希望を書き込むというものである。事業のきっかけとなった治水についての対策(「土砂を流すことが一番の課題」)や、川の活用、川の自然再生などについて意見が出され、後日、次のような整備イメージとしてまとめられた(図5)。

- 河床・護岸に関わること(土砂の堆積・草の繁茂対策)
 - ・自然の営力で維持管理できるよう、流れの蛇行(置き石・水制工)
 - ・河床掘削(河積の確保、砂州・瀬や淵の創出)
 - ・がけ崩れ部への安全対策
- 落差工の改善(魚が行き来できるよう)
 - ・落差工の切欠き
 - ・魚道の設置など
- ゾーニング

自然再生ゾーン、水遊びゾーン、観察ゾーン、釣りゾー



図5 岩本川の「未来希望図」

ンなどに分ける

●利用に関わること

- ・子どもが川に下りられるようにする
- ・安全への配慮（マムシ・川の深み）
- ・川遊び，調査，食べたり飲んだり（花見，紅葉），ベンチの設置など

●維持管理

- ・維持管理組織の設置
- ・人が川を利用することで草を生えにくくする
- ・野焼き，ヤギによる除草



図7 川づくり体験会

＜第三回川づくり懇談会

…岩本川の「未来希望図」実現に向けた方策を考える（12月5日）＞

最終回は22人（子ども含む）が参加し，第二回で出たアイデアを地図上に落とししたものを確認し，川づくりを「どのように進めていくか」を話し合った。行政が行うことと住民ができることの整理，作業の優先順位などがテーマとなった。行政が引き続き浚渫工事を進めるとともに，重機が必要な水制や階段の設置を行うことが説明され，住民ができることとして，丸太や石組による「小さな水制工」や生き物のすみか作り，維持管理体制づくりなどが挙げられた。

アンケートに回答した10人（初参加4人を含む）に「今後岩本川でしたいこと」の項目を提示し，5段階の尺度で回答を求めたところ，「小さな自然再生（川づくり）」については半数が「したい」，残り半数が「してもよい」であり，全員が前向きに事業を捉えていた。「自然観察や環境学習」は「したい」が6人，「してもよい」が2人，「草刈りやゴミ拾い等の活動」についても，「したい」が5人，「してもよい」が4人，だった。回答した人々には岩本川で何らかの行動をしたいという考えがあることが分かった（図6）。

「川づくり懇談会に参加して岩本川への意識が変わったか」については，10人中7人が変わったと答えた。「昔

の岩本川の様子を聞いて，また子供達が遊べる川にしたいと思った」「岩本川に愛着が湧いた」「岩本川を見るようになった」という。感想では「維持管理の組織の結成を早くする事」というものもあった。

第三回には子どもも7人参加した。岩本川でしたいことを絵に描いてもらったところ，釣り，川を上流までさかのぼりたい，川際に小屋を建てて濡れた服を洗濯する洗濯機を置くなどのアイデアが描かれた。

以上のように，2015年度は立ち上げの一年であり，住民たちが岩本川の昔を思い出し，共有し，岩本川の「今」を体感し，将来像を描いた。3回の川づくり懇談会を通して得られた方針は，「土砂が溜まりにくい川」を前提として「①子どもが遊べる川②みんなが憩える川③いろんな生き物が棲む川」であった。川づくりを行う住民組織を立ち上げることにもなった。岩本川が地域の話題となり，新旧住民の意識をつなぐ役割を果たしたことも成果といえる。

・2016年度

事業2年目は扶桑町の対岸，百々町の住民も加わることになった。6月に両町の子ども会役員や住民が参加する「川づくり打ち合わせ会」を行ったうえで7月に「川づくり体験会」で地域の親子52人が岩本川に入り，石を用いた魚道づくりや生き物のすみか作り，川への足場（降り場）づくりなどを行った（図7，図8）。翌8月には「川づくり」の効果確認も兼ねて，前年に引き続き「岩本川探検隊」を行った。岩本川探検隊はその年に流行ったゲームにちなんで「ikimon Go」というテーマを設定，生き物の写真と「レア度」が印刷されたワークシートを作成し，家族ごとに捕まえた生

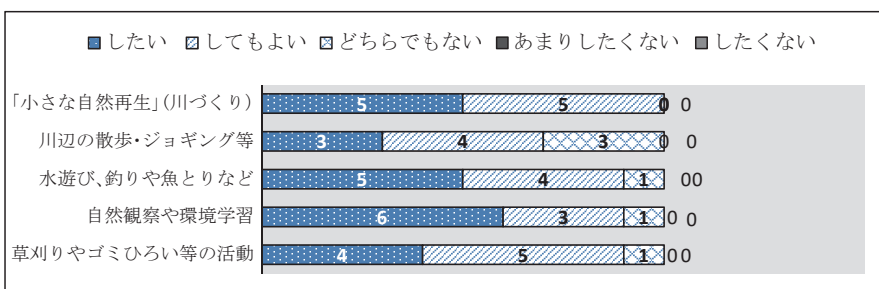
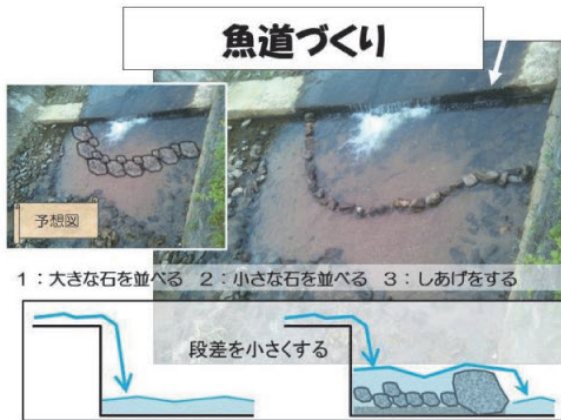
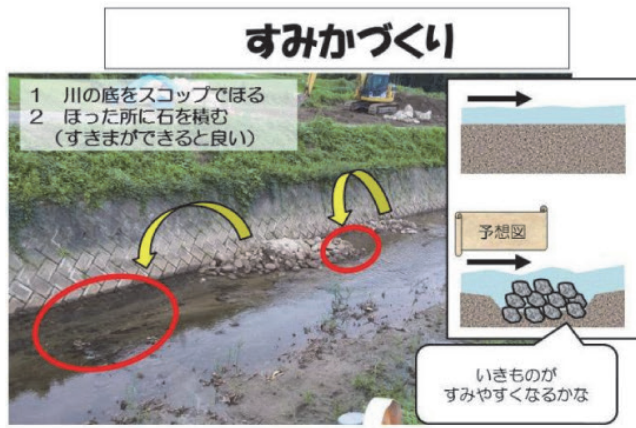


図6 今後の活動について（10人）



1. すみかづくり

単調な川底に、石を置いて隙間をつくり、生き物の棲みかや隠れ場所となるようにした。

2. 魚道づくり

段差が大きいため魚が移動しにくい場所に、階段状のプールをつくり、段差を小さくして魚が移動しやすいようにした。

3. 足場づくり

管理用のはしごしかない場所に、石を置くことで、川へ降りやすいようにした。

図8 川づくり体験会での「小さな自然再生」(左列は当日の説明資料、右列の写真は市民施工後。)

き物の種類数と「レア度」を競うゲーム性のある企画とした。

これら三回の行事でも参加者アンケートを行った（延べ39人）。居住年数は0～10年が19人と最も多く、11～20年が14人、21年以上住んでいるのは6人と長く住んでいる人が少ない。前年度の住民懇談会参加者とは違う層が参加していた。

岩本川を意識していたかどうかについては「全く意識していなかった」15人、「あまり意識していなかった」9人で6割の人が岩本川のことを意識していなかったことになる（「全く意識していなかった」「あまり意識していなかった」「少し意識していた」「強く意識していた」の四尺度）。

岩本川への思い（自由記述）としては「自分で清掃や足場作りをしてキレイを保とうと思いました」という自ら動こうという意思が見えるものや「これからもっと川作りが進んで、日常的に川遊びができるといいと思います」など今後につながる回答があった。

今後「川づくり」をしてみたいと思うかについては、川づくり体験会後は20人中16人が「少し思う」もしくは「強く思う」と回答し、「岩本川探検隊」では13人中11人が「少し思う」もしくは「強く思う」と回答した。

川づくり・川遊びは市の広報誌、広報テレビ番組にも取り上げられ、岩本川が存在がアピールされた。冬には階段が設置され、川への降りやすさが格段に増した。

そして2017年3月に住民による組織「岩本川創遊会」が立ち上がった。会の目的は「岩本川を拠点とし、会員の奉仕活動による川づくりを通し、子どもたちが安全に遊び学べる環境を整備および維持すること」である（会則より）。「川づくり」は目的そのものではなく、「子どもたちが安全に遊び学べる環境」づくりという位置づけである。また、具体的な活動としては「1.川づくり（魚道、魚の棲みかづくり等）により、自然豊かな岩本川を再生する②川遊び体験会の開催により、親子で地域の自然や魅力を体験する機会をつくる③自治区を超えた地域住民が一緒に取り組むことにより、地域の連携を図る」とある。会員は全員男性で発足当時7人だったが半年後には10人に増え、この地区で生まれ育った人は2人、転入者が8人である。

以上のように、2年目は百々町の住民も加わり、住民による初の川づくりである「川づくり体験会」が多くの親子の参加を得て行われ、岩本川が「遊べる川」となっていることが徐々に地域に浸透しはじめた。川に降りる

階段が設置され、川づくりの住民団体も発足し、住民による日常管理の第一歩を踏み出した。

・2017年度

4月早々に岩本川創遊会による「川づくり」が行われ、出水で一部壊れた魚道（石組みによる）を作りなおした。5月には、地元の小学校5年生80人が授業で川遊びを行った（40人ずつ2日間）。これは、前年度にPTA役員および職員を対象に事業の説明をしていたことが功を奏したともいえる。岩本川創遊会と矢作川研究所が安全面での見守りや生き物の捕まえ方の指導等を行った。子どもたちは川遊びをいきいきと楽しんだが、見守りをした岩本川創遊会の一人は児童に「また川で遊んでもいいの？」と尋ねられたといい、川がいつでも遊んでいい場所であることを知らない状況が伺える。

7月の岩本川探検隊は岩本川創遊会が主催し、市は運営の補助を行って、好む生息環境が異なる三種類のドジョウをテーマに「さがせ！ドジョウ三兄弟」をキャッチコピーとして地域の親子28人が川を楽しんだ。9月には岩本川創遊会が主催で川づくり技術講習会を行って専門家から川への石の置き方を改めて学んだ（図9）。

3年目、岩本川は、単調だった浚渫エリアの流れも蛇行するようになり、階段も二基に増えて川へのアクセスのしやすさも向上した。また、岩本川創遊会が主体的に動き、市の補助金を活用しながら毎月の草刈りや、川への石組みなどを行った。

3年目は外部主体によるイベントも開催され、岩本川を介した交流が生まれた。地元の生涯学習施設（高橋交流館）も7月に生き物調査を実施し、親子34人大学生70人という大人数が岩本川を訪れた。これは「岩本川創遊会が事前草刈りをしてくださったからこそできた」という（高橋交流館職員Sさん 170725）。9月の技



図9 川づくり技術講習会

術講習会の翌週には「カワサポ」（流域環境改善に特化したクラウドファンディング組織）が交流研修会のエクスカーションとして岩本川で川づくり体験を行い、岩本川創遊会会員が作業手順をアドバイスした¹¹。

2. 川づくりをする人々の意識の変化 — 「眺める」川から、「見（観）る」川、「変化に気づく」川へ

事業の当初から関わり、岩本川創遊会の会長となったOさんは岩本川の近くで生まれ育ち、事業開始時に小学校PTAの役員をしていたこともあって小学校へのパイプ役ともなった。

活動への思いとしては、自分の経験を「後世に伝えていきたい」というものがあるという。

「岩本川の傍に生まれ育ったなかで川の変化もしているし、岩本川で昔は魚を捕ったり、捕った魚を食べたりするなかで、生き物というものはこういうものだよと教わってきたような気がするのでもそれを後世に伝えていきたい。」

活動は楽しみでもあり不安でもあって、不安な要素としてまずは会員らの「意識の差」が挙げられ、「これから活動に関わる人たちとの意識の差、それは見定めながらやって行きたい」とのことだった。また、安全面も気になることである。

「岩本川下流の、矢作川に接続している部分（危険性が高い）、あそこら辺まで、慣れてくると子どもたちはおそらく行くと思うんですよ。だからそういう時の安全（対策）をどういうふうに教育していくか。ただ単にきれいにする、遊ぶ、という面ではやれるし、継続はしていけると思うんですけどなんかあった時の「安全」という部分がちょっとひっかかる。要は絶対（安全）、っていうことはないの。自然相手だからね。」

これらの不安はあるが、気負いはない。「肩ひじ張らず、助けてもらいながら、周りの人を巻き込みながらやっていければ一番」だという。次の代への継承についても話は及んだ。

「結局、創設した時の思いをある程度、受け継いでもらってないと長続きしないと思うので、その受け渡しをうまくやれば、この事業は成功のかな、僕の役割はそれでいいのかなっていう気はするけどね」（以上会話部分は160618）。

岩本川創遊会が発足してから9か月後、岩本川を前にOさんに聞きとりを行った。

「川はいい感じだと思うよ。両側にそこそこ砂地

があって偏ってないんで。広いところもあり、狭いところもあり、結構いい感じの流れになってるなあ。鳥やなんかも来てる。これが維持できれば。」

住民への影響としては、階段設置の効果があがっているという。

「とにかくね、降りられることが一番だよ。川に近づけるようになった。浚渫してもらって、人が入れるようにしてもらえれば遊べるなあということが分かったのでそれはすごくいいことだと思うよ。きれいな川だもんで。ほういやあ、川をきれいにしたら不法投棄も減ったなあ。」

課題としては、浚渫エリアの広がりにつれて人手が足りなくなることが挙げられた。会員は増えてほしいが基本は扶桑町と百々町の人でやりたいという。会の活動が「負担にならんように」「どこまで整備してどこまで放置するか」、また、小学校や子ども会、手伝いを申し出てくれている地域の高齢者層との連携をどうとるか（会員が動けない平日に散歩がてらの「見守り」をお願いするか、など）についても考えているという。資金の面では市の補助金が3年でおわるため、その後どうするかが課題である。そしてやはり組織の継続の問題がある。

「2、3年はいいけど5年10年経ったときに、人も変わるし環境も変わるし、行政も変わってっちゃうもんで。ほりゃあ、思ったようには行かないと思うよ、いろんなことがね（笑）。その時にどうやって対応してくかっていうのはみんなで知恵出し合って考えないとね。」（171125）。

2018年2月には岩本川創遊会発足からの一年を振り返り、次年度の計画をする会議が行われた。

一年の感想や抱負をと言われ、会員たちは口々に岩本川を「見る」ようになったと述べた。

「川を上から見るのも楽しい。関わっているので見えるようになった」（MTさん）「草刈りは慣れていないが目の前に流れている川なので変化を楽しみながらやりたい」（MSさん）「川で子どもたちをちょこちょこ見かける。そういうのが増えるようにがんばりたい。BBQとか川見ながらやりたいですね」（Fさん）。

他に、ヨシ（茂りすぎをどう防ぐか）、ホタル（浚渫後いなくなったが別の場所にはいる）、鳥（水深が浅くなったので鳥が魚を捕りやすい、魚にとっては逃げ場がない）、浚渫後は聞こえなかった水音が聞こえるようになり夏は涼しげであること、深いところがなくなったため釣りがしにくいことなども話題となった。

会議の後、岩本川創遊会の活動によって川に対する意

識が変わったかについて、用紙に自由記述をしてもらった。「以前は気にしていなかったが、雨の後など見に行くようになった。」「以前は眺めるだったが現在は生き物がいるのかを観る」(下線筆者)、「岩本川の変化に気付くようになった」「川に足を運ぶようになった」などの回答があった。

「気にしていなかった」「眺める」だけだった岩本川は会員の意識の中に根を下ろし、「雨の後に見に行く」川、「観る」川、「変化に気付く」川となって扶桑町と百々町という二つの町の人々をつなぎ、将来こうしたい、こう活用したいという、四季を意識した希望を語り合える場となったといえるだろう。

3. 地域での事業の広がり

地域に事業が広がった様子を図で表現すると次のようになる(図10)。

初年度は市が扶桑町自治区に呼びかけて、「住民懇談会」と「岩本川探検隊」を行った。「岩本川探検隊」は扶桑町自治区が開催に協力し、扶桑町と百々町の住民が参加した。2年目は川づくり体験会と岩本川探検隊を市が主催し、扶桑町と百々町の有志が開催に協力した。平井小学校への情報提供も行った。3年目は草刈りなどの日常の維持管理や石組などの川づくりを岩本川創遊会が行っている。岩本川探検隊は岩本川創遊会が主催した。また、生涯学習施設(高橋交流館)や平井小学校が川遊びをする際には、岩本川創遊会や研究所が助言を行った。地元のボーイスカウトや、岩本川近くの土地を借りて活動している「森のようちえん¹²⁾」団体も週二日の活動のなかで、時折岩本川で遊ぶようになってきている。また、複数の住民から「子どもが遊んでいる姿を見かける」という声を聞いている。以上のように、2015年からの三年間で、岩本川は地域の様々な主体から意識される川に

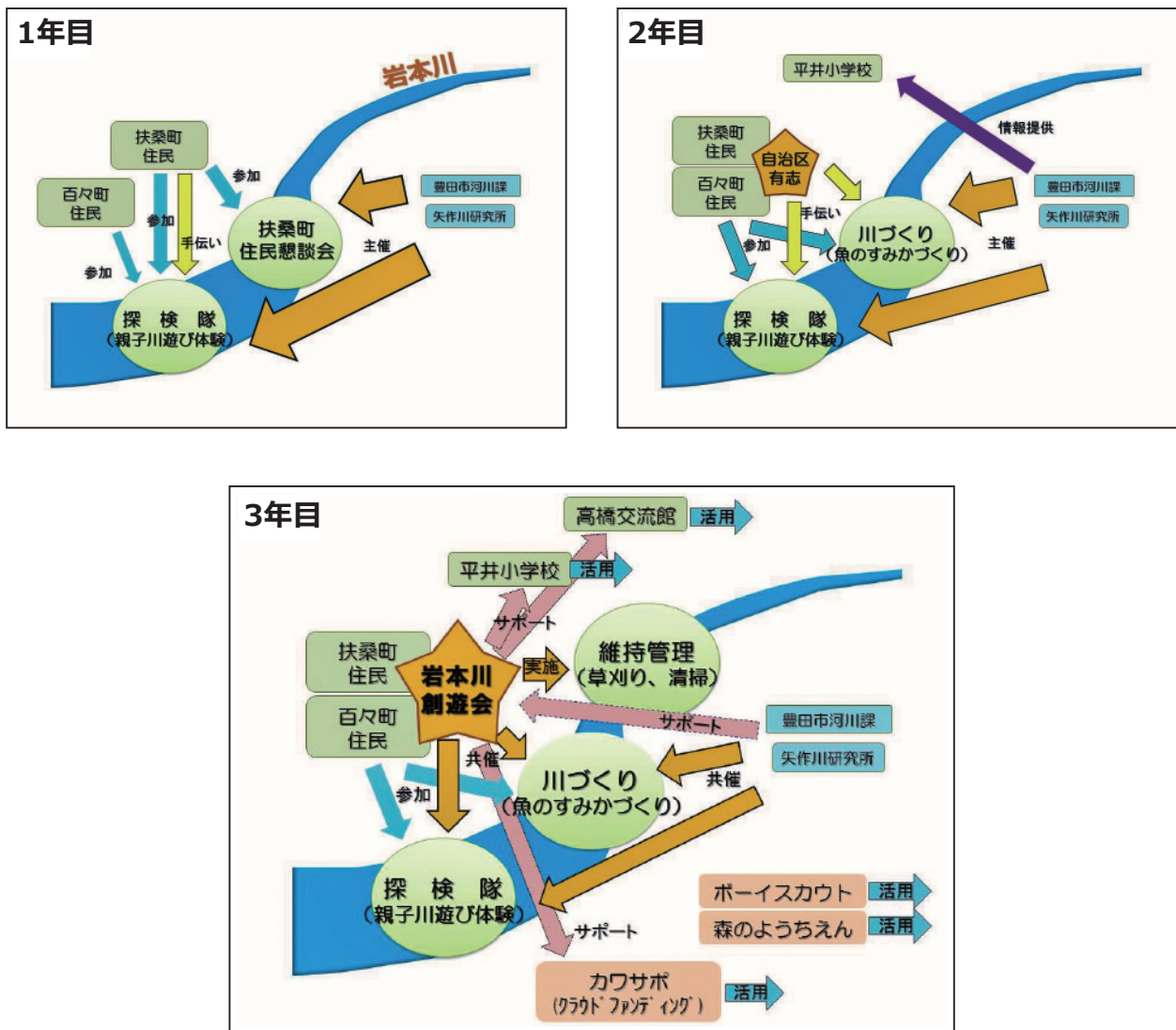


図10 地域での事業の広がり

なった¹³。

まとめ

ふるさと川の川づくり事業において、住民の主目的は「子どもが遊べる環境をつくる」、行政（河川課）の主目的は「治水安全度を高める」、矢作川研究所の主目的は「自然豊かな川をつくる」であり、そこには「ズレ」がある。しかしこれらの主目的は互いに関連しあっており、ここまでは矛盾なく岩本川に関わってくることができた。

土砂が溜まって草が生い茂り、洪水のリスクが高かった岩本川は、市による浚渫や、住民と市による懇談会、川遊び体験会、川づくり体験会という場を重ね、川づくり団体が発足したことで、川遊びができる川、生き物が「たくさんいる」ことを知られた川、人が降りられる川となった。

ここで改めて川づくりの住民団体の発足と継承について考えてみたい。先述した小川の論考では（小川，2003）、古岸水辺公園愛護会について、活動している人々は「地元」（「昔、川とこの土地に密着しこの土地と苦楽を共にしてきた人たち」）であり、「遊んだ川辺とその場に育んだ愛情から動機づけられている」が、『もう一つの地元』である「女性」や「新たな世代」（企業や役所に就職し、上の世代が経験した土地とのやり取りを経験せずに生活している）にとって川辺が『よそ』化しているとして、活動が次世代に継承されるか懸念している。小川はそれらの人々がともにアクセスできる川辺とするために矢作川に「きっかけ」が必要だといひ、子どもの遊び場として矢作川を「解放」した行事に触れる。

ふるさと川の川づくり事業に重ねて考えれば、この事業がまず「地元（住民）」である「水辺愛護会会員」の参加を得た住民懇談会から始まったことは重要だろう。岩本川創遊会の数人は水辺愛護会会員でもあり、ここでもその精神や手法が受け継がれている。

「もうひとつの地元」にとって、岩本川は一度も「うち」であったことがなかった「よそ」そのものだった。しかし、川遊び（のちの「思い出」となる）を活動の核と位置付けることで、水辺愛護会会員がかつて遊んだ思い出を胸に活動することと同様の動機づけとなるだろう。また、岩本川創遊会が川の変化に対応しつつ試行錯誤を続ける川づくりは「土地と苦楽を共に」することだろう。これらの要素によって岩本川創遊会は「もう一つの地元」を取り込んだ会員構成となった。岩本川は「よそ」から「うち」化しつつあり、住民懇談会のアンケートにあった「川イコールふるさとと思える川になってほしい」との言葉

を借りれば、「ふるさと化」しつつあるともいえるだろう。

共働事業としての岩本川での川づくりは2018年度で区切りとなる¹⁴。岩本川で得られた、①「地元」の尊重、②子どもの川遊びを活動の核とする、③住民と行政が将来像を描き、住民が川づくり団体を立ち上げ、自立していくというステップを踏む、④これらを川遊びや川づくりの試行錯誤をしながら進める、などの要素を、今後、他の河川での「ふるさと川の川づくり」に生かしたい。なお、ここで「生かす」というのは、対象となる川や地域にこのやり方を押し付けるものではなく、その川やその地域ならではの固有性が優先される。

一方、課題として「活動の継承」「浚渫区間の延長に対応できる会員数の確保」がある。変わり続ける川と人々、地域に対応するには「順応的ガバナンス」（宮内編，2017）の考え方などに照らしながら試行錯誤を続け、このまま川遊びと川づくりを続けることで継承がなされるのか、なんらかの仕組みを持つべきなのか、模索しなければならぬ。また、事業は防災（治水）上の安全度を高めるために行われているが、この3年間では防災教育等の取り組みはなかった。今後はこの視点からも川と人の関わりを見つめる機会が必要だろう。

研究の課題としては、視野を「まち」まで広げ、この事業に直接関わっていない住民にどのような影響を与えるのか、活動の核である川遊びで子どもたちが何を得ているかについても探りたい。また、岩本川での活動が継承される過程を追いかける一方で、他河川で始まる「ふるさと川の川づくり」において、岩本川での経験がどのように生きるかについても観察したい。

謝辞

アンケートに回答してくださった扶桑町住民、百々町住民の皆様、聴き取りに応じてくださった岩本川創遊会の会長はじめ会員の皆様、ご協力ありがとうございました。また関西学院大学の古川彰氏、豊田市矢作川研究所の洲崎燈子氏には有益なご助言を頂きました。記して心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 「共感と共有の場づくり」「議論で知を磨き形式知を創造」「形式知の体系化と実地演習」「現場検証と軌道修正」の四つの段階がある。
- 2) 豊田市では行政と市民・企業・団体等とで事業を行う「キョウドウ」にこの字を用いる。
- 3) 2016年10月時点。豊田市統計書。

- 4) 百々町では2001年に922人だった人口が3年間で約300人増え、2016年までにはさらに100人増えている(「高橋地区地域情報カルテ」豊田市 2018.3より)
- 5) 正式名は「河川環境復元総合調査研究事業」である。1999年度～2001年度にかけて、「水中・河畔の物理的環境と動植物の生態を対象とした研究を行い、ダム直下における河川生態系のバランス悪化のメカニズムを解明すると共に、流域住民の河川利用史の研究から、河川生態系の回復とよりよい人と河川の関係を模索すること」を目的とし、生物学や河川工学、社会学といった異なる分野の研究者が参画して行われた(事務局：豊田市矢作川研究所)。
- 6) 川辺は基本的に河川管理者が維持管理しており、市が「ふるさとの川」として指定をすることで住民による整備が可能になる。市は水辺愛護会が一堂に集まる「連絡会」や研修会の開催、草刈りの刃の支給や報償費などで活動を支援している。古巣水辺公園愛護会は現在市内に19団体を数える水辺愛護会の先駆けである。
- 7) 当初は対岸の越戸公園が筏の出発点だった。
- 8) 第8次総合計画(2017年3月策定)の基本施策「人と自然が共生する環境にやさしいまちの実現」の実践計画事業の一つ。
- 9) 2014年に「小さな自然再生事例集」(2015年3月)の制作を目的に結成された編集委員会(小さな自然再生の専門家、行政担当者、技術者等で構成)を2016年に改称したもの。
- 10) 朝日新聞2003年6月12日「東海豪雨で流れてきた?豊田の岩本川突然ホタル50年ぶり出現」
- 11) 河川財団河川基金対象事業 Clear Water Project ブログ2017/10/2
- 12) 「森のようちえん」とは、自然体験活動を基盤とした子育て・保育、育児幼少期教育の総称(「森のようちえん全国ネットワーク」ウェブサイトより 2018年10月25日閲覧)。
- 13) 広報としては次のようなことを行った。各行事前の開催案内は町内で回覧、岩本川探検隊については子ども会の会長を通じて募集をかけた。初年度の「岩本川探検隊」の様子は「岩本川探検マップ」として表現し、扶桑町自治区内で全戸配布した。また、自治区民会館に行事報告を随時掲示した。扶桑町自治区が発行する広報でも2ページを割いてふるさとの川づくり事業のことが紹介された。
- 14) 川という性質上、河川管理者である市と岩本川が関わりを持たないわけではなく、研究所としても川

遊びに講師派遣制度「矢作川学校」を利用してもらうなど今後もつながりを持つことを想定している。

引用文献

- 愛知県土木部(1975)47.7 豪雨災害復興誌. 災害復興協賛会, 愛知.
- 古川彰(2003) 矢作川と人の暮らし 5. 矢作川の変化と環境運動. 矢作川研究, 7 : 163-168.
- 林博徳(2015) 上西郷川における小さな自然再生の取組. RIVER FRONT, 80:2-5. 公益財団法人リバーフロント研究所.
- 環境省(2015) 小さな自然再生活動事例集.
- 宮内泰介編(2013) なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性. 新泉社, 東京.
- 宮内泰介編(2017) どうすれば環境保全はうまくいくか—現場から考える「順応的ガバナンス」の進め方. 新泉社, 東京.
- 日本河川・流域再生ネットワーク(2017) 水辺の小さな自然再生 あなたもはじめてみませんか?
- 小川都(2003) 矢作川と人の暮らし 3. 川辺の暮らしと環境利用. 矢作川研究, 7 : 131-156.
- 祖田亮次, 柚洞一央(2012) 多自然川づくりとはなんだったのか? E-journal GEO .7 (2) : 147-152.
- 多自然型川づくりレビュー委員会(2006) 多自然川づくりへの展開.
- 豊田市(2016), 豊田市矢作川河川環境活性化プラン, 豊田市.
- 和田彰, 岩瀬春夫, 三橋弘宗, 原田守啓, 林博徳, 後藤勝洋(2016) 水辺の小さな自然再生を通じた川づくりの人づくりPDCA～コラボで取り組む段階的な人材育成プログラム(試案)～. 応用生態工学会第20回大会.
- 矢作川漁業協同組合(2003)環境漁協宣言. 風媒社, 愛知.
- 吉橋久美子(2016) 愛知県豊田市の水辺愛護会活動の成果と課題. 矢作川研究, 21 : 55-68.

豊田市矢作川研究所
〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館
1F